



# レンズを通して

連載「二月」

写真・文 高円宮妃久子殿下

アトリ 16cm アトリ科

スカンジナビア半島から  
バイカル湖を経て  
カムチャツカ半島に至る  
亜寒帯の森林で繁殖。  
日本には冬鳥として秋に渡来。  
飛来する個体数は  
年により大きく変化する。

# 橙色の カモフラージュ

写真文Ⅱ 高田宮妃久子

冬の探鳥会で多くのバードウォッチャーに人気なのは赤い鳥と青い鳥です。どちらかが姿を現わすと、テンションがあがります。それに比べ、橙色やオレンジは「茶褐色」のひとつで片づけられがち。華やかできれいなのに気の毒なことです。2月は旧暦のお正月。橙は語呂合わせで「代々、家が繁栄しつづけるように」という意味から、また強い生命力をもった果実であることから、お正月の縁起物として人気がありますので、今月は橙色の鳥をご紹介します。

黒とオレンジのコントラストがとても美しいアトリは漢字で「花鶏」と書きます。またアトリが数百羽から、（私は見たことがありませんが）数十万羽の大群をなして移動することから「集鳥（あつとり）」と呼ばれていて、こちらが詰まって「あとり」になったという説が『大言海』に紹介されています。

私が初めて撮ったアトリの写真は50メートルほど先の上空を飛ぶ群れ。羽ばたいては翼をたたんで滑空するのですが、タイミングが悪かったらしく、魚の群れのように写ってしまいました。群れで行動する習性を知ると、いよいよ単独のアトリではなく、群れの写真が撮りたいと思うようになりました。しかしその後、たびたび群れが地面に降りて採餌している時や冬枯れの本に止まって木の実を啄んでいるところを撮影したのですが、どの写真も良くありませんでした。

今回ご紹介している写真は北海道で撮ったものです。雪をバックに飛び立つアトリの姿はとても華やかで「花鶏」らしく、また一斉にどこからともなく現れ、羽音を残して飛び去る「集鳥」の特徴も捉えることができたように思います。アトリの群れがやっとなぐ撮れたのは雪のおかげです。寒いのを我慢した甲斐がありました。

もう一種はヤマガラです。左ページの写真は雪持ちの木々をバックに撮りました。頭でっかちで尾が短く、どこかあどけなく可愛いイメージで、漢字の「山雀」も納得できます。アトリに似たコントラストの強い色合いです。しかし、小さい写真で判別いただけずように、ヤマガラの目立つ羽色も背景によってはうまく同化して、とても見えにくくなります。

撮影する側からすれば鳥に目立って欲しいわけですが、それはあくまでもこちらの都合。鳥たちの意向するところの真逆でしょう。基本的には「目立たない」というのが自然界においての安全保障。人間がきれいだと認識する色彩も、実際には効率よく背景に溶け込むように進化しており、あくまでもカモフラージュの色なのです。

ともすれば、撮影する私はのぞき見をしているストーカーのような存在かもしれません。言い訳のように聞こえますが、いつも心の中で「撮らせてもらいます」を始め、「ありがとう！ またね」で終わるようにしています。鳥の許しを請うて、いましばらく、彼らにストレスをかけないように注意しながら「のぞき見」を堪能し、「隠し撮り」を極めたいと思います。いつの日か、空耳でもいいので「きれいに撮ってね」とでも返事してくれる声を聞きたいものです。



ヤマガラ

14cm シジュウカラ科

山地から平地にかけて生息。雑食で、昆虫やその幼虫、クモ、果実、硬い木の実などを食べる。広葉樹林を好み、秋にはエゴノキの実などの種子を樹皮の隙間や地面に隠して貯食する。



# ヤマガラ

14cm シジュウカラ科

主に日本に生息する留鳥。  
小笠原諸島を除き、  
ほぼ全国に分布するが、  
西・南日本に個体数が多い。  
警戒心が薄く市街地の  
公園などで人の手から  
餌を取ることもある。

